TOHOKU UNIVERSITY

THE HASEKURA BULLETIN

Newsletter of the Hasekura League for Japanese Studies

VOL. 05

September, 2024 Edition

巻頭言―「民本」

大野　晃嗣　教授

東北大学日本学国際共同大学院

(International Graduate Program for Japanese Studies: GPJS)

プログラム長

東北大学は、文部科学省から「国際卓越研究大学」の認定を受けました。 同制度が始まって第一号の認定となります。 東京大学か京都大学が認定されるであろうという下馬評を覆しての認定ということもあって、 新聞にも大きく報道されましたから、ご存じの先生方も多いことでしょう。これによって国から大きな支援を受けながら、国際的な研究・教育の交流環境を整えていくことになります。ただ、この制度に応募する段階から関わってきた者としては、認定されたことに安堵する一方で、今は複雑な心境です。

『書経』五子之歌に「民は惟れ邦の本、本固ければ邦寧し」という、「民本」という言葉の語源ともなった有名な文句があります。 国の基盤は人民であるというシンプルなこの考え方は、「民」を「学生」に、「邦」を「大学」に置き換えてみれば、大学というものの本質にも鋭い質問を投げかけます。社会的に耳目を集める制度の改革や組織の創設が、上述の支援に認定された結果、急ピッチで進んでいます。本学だけではありません。次の認定を狙う各大学も同様です。

『書経』の文句は、その議論の根本に、学問の将来を支える「学生」が豊かで心の底から学問を楽しむことのできる環境についての深い考察はあるか、もしそうでなければ「大学」は危ういということを伝えているように思われます。

支倉リーグはそのような時流の中で、各国からこのネットワークに参加されている大学の教員・学生がそれぞれに学問を楽しみながら対話を重ね、切磋琢磨の上に研究の幅を広げていく空間を目指していきます。何卒ご協力をお願いいたします。

THE HASEKURA BULLETINの第五号をお送りします。成長を続けるネットワークの活動を是非ご一読ください。

ニュース

2024年4月　GPJS新プログラム生3名入学

文学研究科と国際文化研究科に所属する3名の大学院生が新しい仲間になりました。集中講義や国際会議等様々なイベントに参加して活発な交流を行い、支倉リーグの立派な一員になっています。

2024年7月　GPJSプログラム生募集説明会動画公開中

GPJS応募を検討している学生に向けて毎年2回ずつ行っている動画を、本プログラムのYoutubeチャンネルで公開しています。ぜひご視聴とチャンネル登録をお願いします。
https://www.youtube.com/watch?v=oM-gzyqQuB0&t=4s

2024年9月　GPJS夏の研修旅行、初関西進出！

今年はGPJS3回目の研修旅行として初めて東北を飛び出し和歌山県へ赴き、南紀白浜から熊野古道を探検しました。長岡龍作教授（文学研究科東洋日本美術史）の先導で、当地の古寺の建築や仏像を通して関西の風土を感じました（p.2参照）。

今後の予定

2024年12月6-8日

The 6th Tohoku Conference on Global Japanese Studies（東北大学）

2024年12月12-13日

国際ワークショップ "Current Directions in International Japanese Studies"（トリノ大学、イタリア）

2025年2月20-22日

The 5th International Doctoral Symposium on Asian and African Studies（ローマ大学ラ・サピエンツァ、イタリア）

2025年6月24-25日

The 9th Annual Hasekura International Symposium（ブリティッシュ・コロンビア大学、カナダ）

イベント報告（2024 年 4 月～ 2024年 9 月）

- 2024年 4 月 3日（水）- 5日（金）第4回アジア・アフリカ学博士課程ワークショップ (ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、イタリア)

４回目となる本WSには、教員4名とGPJSを含む3名の学生が参加しました。芳賀満教授、ジョシュア・モストウ教授には基調講演を務められました。なお、芳賀教授、木山幸子准教授はチューターとして学生の指導にもあたられました。本WSは学生にとっては海外の教授から直接指導を受けられる貴重な機会ですので、今後も参加を続けていく予定です。ホストとしてお世話くださったニコレッタ・ペサーロ先生に厚く御礼申し上げます。ところで、今回の渡航の目的の一つに、2023年1月5日に逝去されたボナヴェントゥーラ・ルペルティ先生の墓参がありました。ヴィツェンツァ駅で奥様と待ち合わせて墓地に向かい、教員一同手を合わせました。ルペルティ先生はイタリアにおける日本学の第一人者で、ワークショップや支倉セミナーなどを通じて、GPJSには多大なご支援をいただきました。生前頂戴したご高誼に深く感謝いたしますとともに、心より哀悼の意を表します。（横溝博）

- 2024年4月18日（木）国際シンポジウム「文学と生態学」（グルノーブル・アルプ大学、フランス）

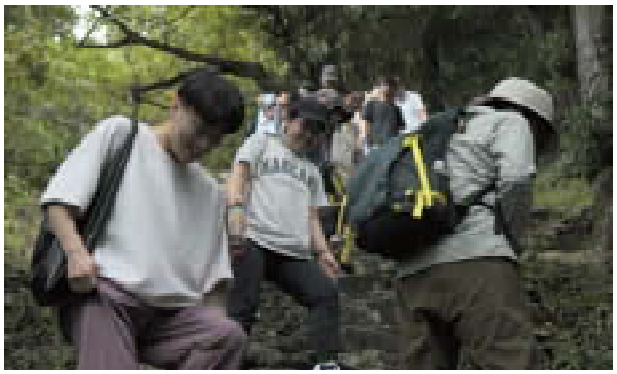
本シンポジウムにGPJSからは4名が参加し、佐藤弘夫GPJS特任教授が2日目の基調講演を行いました。支倉サミットに参加してくださったガーナ大学のA. Imorou先生、クワズールー＝ナタール大学の B. de Meyer先生、また先に東北大学で開催された国際ワークショップに参加した学生も登壇し、支倉リーグを通じたネットワークの広がりが実感される機会となりました。企画の実行にあたっての同大のC. Denoyelle先生, C. Ramero先生, D. Rojas先生の御尽力に厚く御礼申し上げます。（黒岩卓）

- 2024年6月27日（木）第20回支倉セミナー/第29回日本学国際研究クラスター研究会（東北大学）

「林芙美子における「満州」の語り方—戦前から戦後へ」
講師：曾婷婷（中国、吉林大学副教授/東北大学客員研究員）

- 2024年7月4日（木）第21回支倉セミナー（東北大学）

“The paradism shift that wasn’t: The enduring myth of a ‘Closed Country’ and Japan’s immigration policy”
講師：エリック・C・ハン（アメリカ、William & Mary准教授）



- 2024年9月13日 (金) - 16日（月） 第3回GPJS研修旅行（和歌山県）

2022年夏に支倉サミットの海外訪問客を迎えるための準備を兼ねてはじめた研修旅行も、今夏で3回目となりました。南紀白浜の海は青く明るく輝いていました。一転して昼なお暗い熊野古道の原始林では、那智の大滝につながる豊かな水脈に触れながら、日本の宗教の源泉を辿りました。留学生はもとより日本人学生や教員も、紀州訪問は初めてというメンバーがほとんどでしたが、当地の風物や食（と酒）が日常の雑事で蓄積した疲れと汚れを洗い清めてくれたようでした。最終日に訪れた熊野本宮大社では、支倉リーグとGPJSの発展を願い、一同で祈祷を捧げました （もちろん、日本学の研修にもしっかり取り組みました）。（木山幸子）

- 2024年9月25日（水）第22回支倉セミナー/東北アジア研究センター特別講演会（東北大学）

「予期せぬ隣人—イディッシュ文学からみえてくる日本人」
講師：ベル・コトレルマン（イラン、バル＝イラン大学教授/東北大学客員教授）

GPJS 卒業生インタビュー

第 3 回

増田友哉 さん（GPJS 第 2 期生）

東北大学大学院文学研究科日本思想史専攻分野・博士後期課程修了

現職：日本学術振興会特別研究員（東北大学）

Q1. 東北大学での大学院生生活を振り返って、増田さんご自身にとってGPJSはどのような役割を果たしたと考えていますか。

ー私にとってGPJSでの経験は、国境や学問分野を越えた様々な人々とのつながりを作るための役割が大きかったと思います。研究の取り組み方や課題に悩んだ時に、専攻分野以外の教員や院生に相談できるような環境があるのは、GPJSに所属していた大きなメリットでした。また、様々な分野の研究者による発表や講義、論文に触れることで、自身の研究を学際的な視点から進めるという点においても、GPJSでの活動が役に立ちました。これからの研究活動においても、GPJSでの活動を通じて知り合った人々とのつながりを積極的に活用していきたいです。

Q2. 増田さんが留学したライデン大学は、日本学の古い伝統を誇っています。ライデン大学の日本学の様子、その国際性や学際性も含めて、どのようなところに特徴があるか教えてください。

ーライデン大学は1855年に日本学科が設立されたという、欧州で屈指の日本学の歴史を有しています。また、ライデン市にはシーボルトが幕末の日本から持ち帰ったコレクションを展示するシーボルトハウスがあり、毎年Japan Marketが街中で行われる等、日本文化への親しみを感じることが出来ました。日本学科の学部生は、日本のアニメやゲームといったポップカルチャーに高い関心を持っており、歴史や文学、宗教文化への関心はそこまで高くないように感じました。一方で、院生やポスドクになると、世界中から留学生や研究者が集まっており、とても高いレベルでの研究活動が行われていました。その際、地域研究としての日本学として、文学や歴史、人類学といった専門分野の垣根を越えて、日本研究者間での積極的な議論が行われていたことが印象的でした。

Q3. 増田さんがGPJSに入ったころと異なり、現在支倉リーグは30校にまで増えています。支倉リーグは今後の若手の本学研究者にとってどのような貢献をできると思いますか。また支倉リーグに望むことはありますか。

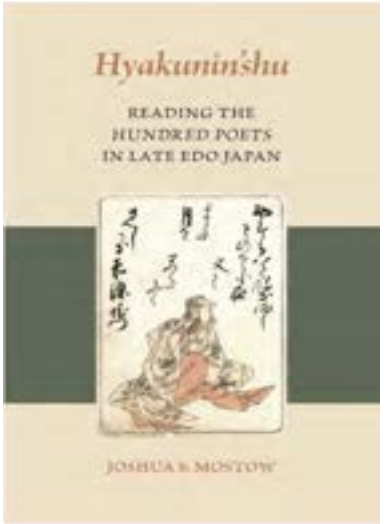
ー日本学という学問領域において、複数大学による面的な交流を実現している支倉リーグの存在はとても貴重であると考えています。特に若手研究者にとっては、ワークショップ等での研究発表や交流を通じて、新たな方法論や研究潮流を取り入れる場となることが大事だと思います。また、ポスドク等の早期キャリアを海外大学で積むための人脈形成や情報交換の場としても活用可能だと考えています。個人的には、支倉リーグに所属する大学の院生同士での研究交流がもっと盛んになるとよいと考えています。特に、自身の研究と関連する研究を行っている院生と知り合う機会があると、共同研究等の可能性がもっと広がると考えています。また、支倉リーグ参加大学の日本学分野の教員の名前と専門、研究内容が一覧的に分かると、コンタクトを取る際に便利だと思います。

Q4. 増田さんはGPJSの要件を満たしながら、順調に学位取得を達成されたと思います。それはどのようにして可能となったと思われますか。困難なこともあったかと思います。

ーGPJSでの定期的な研究発表の機会が研究に取り組むペースメーカーの役割を果たしてくれたと考えています。また、英語で発表することや、思想史を専門としない研究者に発表するという点を意識することで、従来の思想史研究とは異なる視点から研究を進めることができました。GPJSでの活動は口頭発表が多かったのですが、頂いたフィードバックを基に、出来るだけ早めに研究論文の執筆に取り組んだことが良かったと考えています。困難なこととしては、英語の問題が最後までありました。円滑な英語コミュニケーションの実現や論文等のアウトプットを英文でするということは、これからも積極的に取り組んでいこうと考えています。

ありがとうございました！増田さんがオランダ留学中に目をとめた菅原道真の歌は、これから国際的に活躍しようとする後進のプログラム生を鼓舞してくれるように思います。今後のご活躍を楽しみにしています。

国際日本学の今ー新刊案内



ジョシュア・モストウ先生（ブリティッシュ・コロンビア大学教授、カナダ）

Hyakunin'shu, Reading the Hundred Poets in Late Edo Japan
University of Hawai'i Press, 2024

紹介者：横溝博教授

本書は安政年間に刊行された絵入本『慶玉百人一首』を底本として、1ページに1首ずつの影印を載せ、和歌と注釈部分の英訳、挿絵の解説を施した本です。江戸時代を通じて何度も版行され、江戸庶民に親しまれた『慶玉百人一首』を底本に選定されたモストウ氏の慧眼は注目に値します。

モストウ氏は1996年に出版された単著を出発点として、日本の王朝文学とくに『伊勢物語』および『百人一首』の研究とその翻訳の普及に大きく貢献してこられました。本書の46ページにわたるイントロダクションは圧巻で、そこには近世における様々なバージョンの『百人一首』が、豊富な図版をともなって解説されています。これは他でもなく、モストウ氏だからこそ成しえた文章であると言えるでしょう。その意味では、本書は欧米における『百人一首』研究の第一人者による集大成とも言うべき決定版であり、広く『百人一首』に親しみたい者にとってバイブル的な書物と呼んで過言ではありません。

2024年4月　ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学で行われた第4回アジア・アフリカ学博士課程ワークショップで、横溝教授（右）と再会を祝うサバティカル中のモストウ教授（左）

仙台城（青葉城）址で東北大学川内キャンパスを見守る支倉常長

2022年9月　東北大学総合大学100周年記念として開催された支倉シンポジウムの懇親会で、東北大文学研究科の大学院生時代の恩師の佐藤教授(右)と談笑するクラウタウ准教授（左）

オリオン・クラウタウ先生（東北大学准教授）

『隠された聖徳太子ー近現代日本の偽史とオカルト文化』
ちくま新書、2024年

紹介者：佐藤弘夫名誉教授

クラウタウ氏は、数多くの著書や論文をもち、国際的な舞台で活躍する、近代日本仏教の代表的研究者である。

聖徳太子には、さまざまな真偽不明の伝説が纏わりついている。本書は、「偽史」として排除されてきたそうした言説を取り上げ、娯楽としての「偽史」と学問としての「歴史」の共存の構造に光をあてる。さらに、なぜ人は「オカルト」を求めるのかという、心の根幹の問題にまで踏み込んでいく。既存の枠組みを超えた研究方法を追求する、知的刺激に満ちた作品である。

本書は、アジアの思想文化に関わる若手研究者を対象とする2024年度中村元東方学術奨励賞を授与された。私も出席したが、授賞式はインド大使館で、インド駐日大使が臨席する盛大なものだった。

編集後記：第5号の刊行がすっかり遅くなってしまいました。今年度も、ますます支倉リーグの対面による学術交流が活発化しています。初期のプログラム生たちが少しずつ巣立ち、それぞれの進路で活躍するようになってきました。現役の若いプログラム生たちは、果敢に訪問研究者と関わりをもちながら多くを学んでいます。今後も、支倉リーグに関わる方の研究成果や交流について、随時様々な形でとり上げていきたいと思いますので、皆さまからの情報をお待ちしております。（木山幸子准教授/GPJS広報担当）

東北大学
日本学国際共同大学院

事務局
980-8576 仙台市青葉区川内 27-1
e-mail: gpjs@grp.tohoku.ac.jp